

こわい　こわい

僕が出かける準備を済ませて立ち上がると、そばで泣きべそをかいていた五歳の息子が行かせまいと、右足にしがみついた。それを見て、気の強い三歳の次男は左足に抱きついて、太ももに噛みついた。

「いたた！　こら相圭サンギユ||**お父ちゃん**やめなさい。アツバお父ちゃんはどうしても外せない急なお仕事だから仕方ないでしょ」

「そうよ、サンちゃん、やめなさい」妻がサンギユを抱きあげて引き離した。

僕はゆっくりしゃがんで、声をあげて泣き始めた長男の龍圭ヨンギユ||**お父ちゃん**を抱きしめた。長男の躰は強張っている。だけど、僕から逃げようとはしない。怒りと悲しみで体温があがっている子どもからは、日向のようないい匂いがして、胸がきつく締めつけられた。

「ヨンギユ、次の日曜は絶対大丈夫だから、我慢して、な。約束する。指切りげんまんしよ」

フアン
ヨン
チ
黄　英　治

「いやだ、今日行くことだって、指切りげんまんしたよ……」

涙で輪郭が崩れてしまったような顔で、しゃくりあげながら訴える。そうだよな……。指折り数えて待っていたウルトラマンシヨードなもの。家族で後楽園遊園地へ行くはずだった。シヨードが終わったらアトラクションに乗りうと約束していた。おまけにきょうは五月晴れ。マンシヨンの裏にある公園の新緑を歌わせた薫風が、この部屋にもそよいでいた。

昨夜、九時前に帰宅して玄関続きのダイニングキッチン
の灯りを点けると、バジャマ姿のヨンギユが寝室にしている
和室から走り出て来た。その両手には、ソフビのウルトラマ
ンとお気に入りの怪獣ゼットンが握られている。

「おかえりなさい。アツバお父ちゃん、明日だよね！」
瞳をキラキラさせて、ウルトラマンを振りながら、僕を

見あげて言う。

「た、だいま、まだ寝てなかったのか……」

僕は息子を抱きあげてそう応えたが、喉が詰まる感じがして、次の言葉が出なかった。

「もう、ヨンちゃん、寝なきやダメでしょ。明日起きられないくて、お出かけできなくなっちゃうよ」息子らと添い寝していたらしい妻が和室から出てきて、呆れ顔で言った。「サンギユはすぐ寝付いたけど、電気を消してもヨンギユはウルトラマンごっこやめなくて。やっと静かになり始めたところだったのに、鍵を開ける音でぱっと眼を開けて、ダツシユよ」パートがない休日前夜のゆとりだろう、妻は笑みを浮かべて、僕が帰宅する前の様子を簡潔に伝えた。

「そうか、ヨンギユはそんなに楽しみか。なら、お母ちゃんオンマの言う通り、早く寝ないと明日お出かけできなくなるよ」

抱いた長男を妻に預けながら言った。我が子に嘘をついている罪悪感が、少し声を震わせているのを自覚していた。

「そうよ、ヨンちゃん、お布団へ行くよ」妻は僕の声の震えに気づかず、明るい声だ。

「ハイお母ちゃん。オンマ、早くお布団に連れてって。お父ちゃんアツバ、おやすみなさい」

「牛スジ炒めがフライパンにあるから、まずそれを食べて。すぐだから」

和室のふすまを閉めながら妻が言った。そういえば砂糖の混じった醬油とニンニク、コチュジャンにからんだ脂の濃い肉の、食欲をそそるいい匂いがする。僕は牛スジ炒めを温めて、フライパンのままテーブルに置いてひとつ口に入れた。歯ごたえを楽しみながら奥歯に力を入れると、甘辛い味に牛スジの旨味が融け合って口中に広がる。上出来だ。下ごしらえがしっかりできているから灰汁あじっぽい臭みが抜けて、上質の脂と肉の味が立っている。冷蔵庫からロング缶のビールを出してグラスに注ぎ、一気に飲み干した。ふすま越しに聞こえていた妻と長男の微かな話し声が絶えている。二杯目をグラスに注いで半分ほど飲み、ふたつみつつ牛スジを頬張っていると、ふすまが開く音がして、妻がキッチンに入ってきた。「寝たよ。今度は早かった。ウルトラ怪獣の名前を好きな順に教えて、つてやってたら、十二匹目で、ことごと。いまごろ夢の国で怪獣と闘っているんじゃない」

「本当に楽しみなんだな……」
「私も楽しみにしているよ。久しぶりじゃない、家族四人で出かけるの。あなたずっと忙しくて、週末ごとに出張ばかりでさ」

僕は妻の言葉で、自分の考えが揺らぐのを意識した。息子たちなら何とかなる。だが、彼女もそれを待ち焦がれていたとなると……。とにかく話してみるのだ。僕は、半分に

なつたグラスのビールを飲み干して、新たなビールでグラスを満たした。ロング缶はちょうど空になった。妻が冷蔵庫から次の缶とキムチ、作り置いていたらしいサラダを出してテーブルに置いた。

「私にもちようだい。この一杯を寢酒にするわ。明日は五時起きで、お弁当を作るからね」

「そうか、お弁当……。抜かりのない妻のことだ、材料の買い出しはもう終わっているだろう。僕は追いつめられる気分で牛スジをつまみ、ビールをグラスの半分ほど飲んでから新しい缶を開けてグラスを満たし、妻に差し出した。彼女はゴクリと喉を鳴らしてビールを飲んだ。

「ああ、美味しい。ちよつと箸かして」彼女も牛スジを口に運ぶ。「うん、うまくできてる」

妻は牛スジをキムチで巻いて、もうひとつ頬張った。

「おほつ、こうするとまた絶妙。牛スジは残つてもスープにできるから一石二鳥ね」

「うん、そうだね」と相槌を打つ。……話のきつかけがつかめない。もう言うしかない。

「あのさ……」何かをねだる、おどおどとした感じで、嫌になる。

「何？」様子が変なのに気づいたようだ。声音に角が立った。「明日のお出かけ、一週間延ばせないかな？」

「えー、また仕事なの？」ビールのせいだけじゃない赤みが顔にさして、視線がきつくなつた。

「いや、仕事じゃないんだ……。あのさ、君もひどく憤つていたZ Tグループ。あの差別集団が明日、新大久保でヘイトデモをすんだ」

「えつ、新大久保で？」妻の眼が怯えをはらんで彷徨つた。

「うん。で、それに抗議し、奴らを包围して、ヘイトを無化するカウンターへの参加呼びかけを今日、メーリングリストで受け取つたんだ」

「……」妻は黙つたままで、嫌悪を頬のあたりに漂わせている。

「明日のカウンターに参加したいんだ。Z Tグループが叫ぶ『朝鮮人を叩き出せ！』『みな殺しにしろ！』には、ヨンギユとサンギユ、君と僕も含まれているわけだろ。『殺せ』と言われている当事者として、『殺すな！』と抗議したい」

妻は息を呑んだ。ビールで赤みがさしていた顔が、青白くなつている。そして、ふーつと長く息が吐かれた。

「来週は大丈夫なの？ 次の日曜もZ Tがデモするならどうする？」

僕は妻の言葉に戸惑つた。何が言いたいのか、わからない。「どういうこと？ お出かけを一週間延ばしてもいいということなのか」

「そうよ。私も抗議に行きたいけど、子どもたちを連れては無理だし、あの子たちにヘイトを聞かせたくない。あなたが私たちの分まで、ね。でも、Z Tのヘイトデモは明日だけじゃないでしょ？ 来週もあつたら……」

僕は初参加なので、確実なことは言えないが、何度も参加した人によれば、今日のカウンターは「大成功」だったようだ。百人足らずのZ Tグループに対して、カウンター側は五倍以上の人数で圧倒した。警察はZ Tグループを守るのに必死になっていた。

「奴らを通すな！」「レイシスト帰れ！」「民族差別をやめよう！」「朝鮮学校への襲撃を許さない！」カウンターの抗議は、奴らの罵声を凌駕していった。

僕も叫び続けた。「帰れ！」「ヘイトをやめろ！」「言葉の刃物を捨てろ！」と。喉が哽れた。

だが、言えなかったこともある。歩道でデモに並進していた僕を指さして、旧日本軍の軍服を着た青年が薄笑いを浮かべて「朝鮮殺せ！ みな殺し！」「朝鮮殺せ！ みな殺し！」と、変な節をつけて連呼したとき、「そうだ、おれは朝鮮人だ！ お前は本当におれを殺すのか？」とは……言えなかった。怒りよりも現実的な恐怖で、僕の口は一瞬にして、凍えた。

カウンターが圧倒したにせよ、ヘイトスピーチは聞こえていた。「殺せ！」「首吊れ！」「除鮮！」「慰安婦＝売春婦」というプラカードが、日の丸と旭日旗に飾られて歩いていった。脅迫は、僕の鼓膜を振るわせ続け、網膜に焼きつけられた。

どんなにカウンターが「成功」しても、ヘイトスピーチは顕現していた。だが、抗議し、包囲しなければ、ヘイトは歯止めをなくして、この社会を覆い尽くし、排外暴力を誘発し続ける……。賽の河原にいるような徒労感に襲われていた。新大久保駅からの山手線。座れてよかった。僕の心と軀は、浴び続けたヘイトで、いたるところが脱臼していたから。

「ウルトラマンショーの代わりにはならないけど、午後にはそこへ出かけるから合流して」

僕が家を出るとき、しゃくりあげるヨンギユを抱いて背中をなでながら、妻が言った。駅西口のデッキを中心に西口一帯で行われる、市主催の子ども祭りのことだった。

数日前、妻が市の広報を見せながら、「お出かけと重なっちゃったね」とちよつと残念がっていた。着ぐるみショーがあり、ストライクボードやミニSL、ゴールキックなどの遊びのコーナーはすべて無料。景品がもらえるスタンプラリー、出店も豊富、と広報にあった。

僕は乗換駅の日暮里で、妻に到着時間をメールした。す

ぐに「了解。改札で待つ」との返信があった。

改札の手前からコンコースを見ると、子ども祭りのせいで、いつもより人通りが多い。妻と子どもたちを探す。

お父ちゃん
「アツパ！」

自動改札を抜けると、ヨンギユの声が聞こえた。人波をぬって走り寄つて来た。もう泣いていない。いつものヨンギユが、僕の右手をつかんで、うれしそうに微笑んで振り向く。その視線の先に、手を繋いでこちらへ来る妻とサンギユがいた。

「た、だいま」

「おかえりなさい。ぼくね、あそこでSLに乗つたよ。サンギユも一緒に。もう一回乗りたいなあ。お父ちゃんアツパにも見て欲しいもん」

「お疲れ様。どうだった？」

「うん、とにかく……とにかく、疲れた……」

勘のいい妻は、それ以上言葉を継がなかつた。その代り、子どもたちに、自分の気持ちを盛り上げるように言った。

「よし、じゃあ、あそこで動物風船もらつて、それからミニSLにもう一回乗ろうか」

「うん、やったー」ヨンギユが歓声をあげた。

独立独歩のサンギユが、とことこと風船が飾り付けられたブースに向けて歩きだした。ヨンギユが弟に追いついて手を繋いだ。僕たちの前を三組ほどの親子連れが横切り、子ども

もたちが見えなくなつた。と、サンギユがこちらへ逃げ走つて来る。ヨンギユも怯え顔だ。

「どうしたサンギユ」

「こわい、こわい」

僕はサンギユを抱きあげた。ヨンギユは妻の後ろに隠れて、顔だけを覗かしている。僕と妻が、子どもたちが逃げて来た方を見ると、深こまひ緋色の鮮やかな地に、金色のバザン刺繍がついたアフリカの民族衣装、ブレードのアフロヘアのでつぶり太つた黒人女性が見えた。

「こわい、こわい」

サンギユが僕の胸に額を押しつけて、もう一度言った。

かつ、と恥でこめかみのあたりが熱くなつた。「肌色」のクレヨンを使つていた記憶と、新大久保でのヘイトの嵐が頭のなかを駆け巡る。軍服姿の若者と自分が重なる。彼女は真っ直ぐこちらへ歩いて来る。強い光を放つ彼女の眼が僕を金縛りにした。

「バカヤロウ」

つぶやくように、しかし、僕らに聞こえるように、彼女はそう言った。真っ直ぐ前を見据えた彼女は、僕たちの前を、凛と胸を張り、さわやかな柑橘系のコロンの香りを残して、通り過ぎていった。